

小泉八雲をよむ

こいずみ

やんち

令和6年度 第39回

感想文・詩入賞作品集



共催 松江市
松江市教育委員会
一般社団法人八雲会

©soh

文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とした様々な事業を行っています。

昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十九回目となりました。今回は、感想文七十七編、詩三十五編、合計百十二編の力作をお寄せいただきました。

作品集には、応募作品のうち優秀賞、優良賞及び佳作を受賞した十四編の作品を掲載しています。多くの皆様にこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと思います。

結びに、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

令和七年三月

共催 後援

松江市・松江市教育委員会・一般社団法人八雲会

新宿区・熊本市・焼津市・小泉八雲記念館・山陰中央新報社

朝日新聞松江総局・毎日新聞松江支局・読売新聞松江支局

産経新聞社・日本経済新聞社松江支局・中国新聞社

新日本海新聞社・島根日日新聞社・共同通信社松江支局

時事通信社松江支局・NHK松江放送局

TSKさんいん中央テレビ・BSS山陰放送・日本海テレビ

エフエム山陰・山陰ケーブルビジョン

目次

★第39回 感想文 入賞者

★小学生の部

〈優秀賞〉	「おしどり」を読んで	島根県松江市 北村 絵澄	1
講評			2

★中学生の部

〈優秀賞〉

思いこみのあやうさ

広島県福山市 佐藤 絢音	2
--------------	---

〈優良賞〉

「雪女」を読んで

広島県福山市 森岡 日菜	4
--------------	---

〈佳作〉

「耳無芳一の話」を読んで

広島県福山市 吉田 壮佑	5
--------------	---

講評	6
----	---

★高校生の部

〈優秀賞〉

音のない世界で見つけたもの

京都府京都市 中村 天希	6
--------------	---

講評	8
----	---

★一般の部

〈優秀賞〉

「雪おんな」の正体に迫る「東大講義録」をレンズにして

福岡県北九州市 松本 航平	8
---------------	---

〈優良賞〉

「日本人の微笑」を読んで

神奈川県横浜 新倉 久恵	10
--------------	----

〈佳作〉

「こころ」と呼ぶ愛

京都府京都市 如月 七日	12
--------------	----

〈佳作〉

時空を超える八雲の魂「門づけ」の印象

福岡県飯塚市 井上 卓也	13
--------------	----

〈佳作〉

小泉八雲が日本の教育に残したもの

埼玉県熊谷市 風間 麗子	15
--------------	----

講評	17
----	----

第35回 詩 入賞者

〈優秀賞〉

抽斗の奥には

青森県八戸市 長根 りんこ	17
---------------	----

〈優良賞〉

引き袖

埼玉県さいたま市 くるみ	18
--------------	----

〈佳作〉

海を越えて

大阪府大阪市 宇里 直子	19
--------------	----

〈佳作〉

むかしのはなし 今のはなし

神奈川県横浜 新倉 久恵	20
--------------	----

講評	21
----	----

感想文

小学生の部

〈優秀賞〉

「おしどり」を読んで

島根県松江市 北村 絵 澄

私は、落語をならっています。落語の種類の一つに、怪談話があつて、落語の先生が、「おしどり」を読んでもくれました。私は、怪談は怖いものだと思つていたけれど、この話を聞いたあと、これまでに感じたことのないような悲しみが心に残りました。そして、この作品を落語でやつてみたいと思いました。

作品の中で特に心に残つたのは、めどりが孫充の夢の中で叫んだ、「ああ、あなたにはわからない。ご自分が何をしたか、知るよしもない。」という言葉です。私は、落語でめどりの気持ちを表現できるように、めどりが話したくさんの言葉を何度も練習しました。でも何度やつても、どこかうまく表現できていないところがあるように感じてしまいます。それはめどりが孫充の夢に現れた理由や、自分の身を引きさいた理由を、私がきちんと理解できていないからだと考えました。

そこで、小泉八雲が書いた英語の原文を、単語の意味を調べながら、じっくり読むことにしました。めどりが話をする場面を八雲がどう表現しているかをくわしく知れば、めどりの言葉に込められた気持ちがかかるはずと思つたからです。それで気がついたのは、めどりが泣くようすの変化が細かく表現されていることです。それまで私は、めどりの強い言い方が、孫充への怒りや憎しみを表わしていると考えていました。でも、めどりの心の中には、どこまでも深い悲しみがあつて、それを伝えるために夢の中に現れたということ、そして、それを伝えるためには自分の身を引きさくしかないほど、その悲しみは深いものだったということがわかりました。

私は、めどりになりきつて、その気持ちを表現してみようとしたが、本当に大切な人を失うという経験をしたことがない私は、やつぱりうまく表現できないように感じました。そしてそれは、お腹がすいたという理由でおどりを殺してしまった孫充にとつても同じなのだと思います。「ああ、あなたにはわからない。ご自分が何をしたか、知るよしもない」というめどりの言葉がどういう意味なのか、すこしわかつた気がします。

本当にめどりの気持ちになるのは、とてもむずかしいことです。でも、「もしも自分の大切な人をうばわれたとしたら」と、うんと想像すれば、めどりの気持ちにすこしは近づけるかもしれません。孫充は作品の最後に、自分の行動を反省して僧になります。もし孫充が、愛する人を殺される気持ちを想像していたら、おどりを殺すことはなかつたと思います。私は、まだあまりたくさんを経

験していないけれど、ふだんの生活でも、めどりの気持ちを表現しようとしたときに、周りの人の気持ちをうんと想像して、自分の行動を見つめ直すようにしたいと思います。

講評

小学生の部は三点の応募があった。昨年度は一点であったので、多少なりともNHK朝の連続テレビ小説「ばけばけ」の効果があつたのかもしれない。三点のうち、二点是小泉八雲の作品を読み込んだものであり、一点は小泉八雲の人物像に迫るものであったが、それぞれが小泉八雲の作品や人物と、自分や自分の生活とを関わらせながら感想を述べており、小学生らしい読書の姿を感じることができた。

優秀賞の「『おしどり』を読んで」は、自分の習い事である落語を通して作品と出会い、落語でうまく表現したいという思いから、作品の英語原文まで読み込み、自分の考えを広げ深めていったことが伝わるものであった。自分の生活に根付かせて読書を深め、小泉八雲の文学に親しむ姿に好感が持てた。

(講評者 井上 孝弘)

中学生の部

〈優秀賞〉

思いこみのあやうさ

広島県福山市 佐藤 絢音

普通の社会人なら、だれでも持っているはずの知識や考え方を「常識」という。私は今回「常識」という小泉八雲の話を読んだ。もともと、「耳なし芳一」は知っていたが、作者の小泉八雲については全く知らなかった。だから今回は、作者についてと、読んだことのなかった「常識」を調べたり読んだりした。

この話は、高僧と獵師が出てくる。この二人は正反対の人物で、高僧は博学であったが、他の事はあまり考えていなかった。獵師は知識はなかったが正しい判断ができた。

ある日、高僧の誘いで夜に寺へ行くこととなった。高僧によると、最近夜に普賢菩薩がお見えになるらしい。だから一緒に拝もうというのだ。その夜に高僧らが待っていると、天に普賢菩薩の姿が見えたが、獵師は菩薩に向かって矢を射った。獵師は、生計のために生物を殺すような人は仏様を拝むことはできない、だからこれはあなたを殺そうとする何かの化物に違いない、と高僧にいった。翌朝、獵師と僧は矢に貫かれた大きな狸の死体を発見し、物語は終わる。

読み終わったとき、私は「常識」について深く考えさせられた。

物語の終わりには「この生れながらもついていた常識だけで直ちに危険な迷を看破し、かつそれを退治する事ができた。」とあるが、本当にそれだけか。考えるにあたって、まず作者について調べた。

小泉八雲（パトリック・ラフカディオ・ハーン）は、ギリシャで生まれた。十六歳の時に左目を失明してしまう。その後、アメリカへ単身で移民。その際、英訳された「古事記」などの影響で、日本へ来日する。来日後、約三十の作品を残した。（怪談 など）

これから分かったことは、小泉八雲の作品にはこわい話が多いこと、外国人であることだ。また、単身でアメリカに行っており、勇気がある人物だと思った。これをふまえて「常識」について考えてみた。

私が考えた結論は、「常識」は小泉八雲自身の経験をもとに書いたのではないか、という意見だ。八雲は前述したとおり、外国人である。だから、文化や考え方に八雲自身の「常識」があり、これは日本人の「常識」と多少の誤差があると思う。例えば、くつを履いたまま部屋に入る文化は日本にはない。また書道などは日本ならではの文化だ。

ここで確認したいのは、「常識」という話の中の「常識」だ。この話の中では、狸（にせの普賢菩薩）と高僧の「常識」と狐師の「常識」の二つがあると考えられる。狸と高僧はきつと「仏様は拝むもの」という「常識」があったのだろう。逆に狐師には「仏様は常日頃から修行しているような限られた人にしか見られない」とい

う「常識」があったと考えられる。

私は、狸や高僧の意見も十分理解できる。「仏様は拝むもの」という意見は、裏返すと「仏様はだれでも拝むことができる」ということだ。高僧が実際そこまで考えていたかは分からないが、そういう考え方もあると思うのだ。実際、仏教にもこの二つの考え方がある。

小泉八雲は、その人生で何度も移住している。だから、本人も自分と違う「常識」を持った人間とたくさんふれ合ってきたと思う。実際に奥さんは日本人で、本人から見ると外国人である。お互いにとまどうことがあったと十分に考えられる。それでも結婚し、子供をつくったということは、八雲が「異国文化を認めた」といえるのではないだろうか。

これまで考えてきて、私は「常識」という話は、小泉八雲自身の経験をふまえて書いた話だと考えた。また、「常識」をとおして、ものの見方や考え方は人によって違う——つまり「常識」は人によって異なることを伝えたかったのではないかと思った。

私がこの話を通して、今後にかそうと思ったのは、もの事を決めるときはみんなで話し合うようにしたい、ということだ。結論として八雲は「見方の違い」を述べたかっと思う。「常識」の話の中では、高僧の「思いこみ」が自ら首をしめることになっていた。これからは、協力していくときは、第三者の意見を取り入れ、「思いこみ」を減らしていこうと思う。

〈優良賞〉

「雪女」を読んで

広島県福山市 森 岡 日 菜

とても不思議な話だったと思う。私には雪女の言動が理解できなかった。疑問に思うことが幾つかある。雪女は白雪として、巳之吉の前に現れた。何が目的だったのだろうか。監視するために来たとしても言うのか。だとすれば、何故翌年に来たのだろうか。監視したいのならもっと早く来るべきではないか。そもそも、何故自身のことを人に話されたくないのだろうか。何か人に知られて困るようなことがあるのだろうか。

最後のお雪の台詞である「それは私、私、私でした。……それは雪でした。」とはどういう意味なのだろうか。雪とは雪女のことなのだろうか。何故三度も私と言ったのだろうか。何故その後お雪は去ったのか。わざわざ来た意味も、去っていった意味もわからない。去ってしまえば、来た意味なんて本当になくなってしまふ。もし監視するために来たのだとしたら、巳之吉はあの日のことをお雪に話してしまっている。言うなと言われていたことを人に話してしまったのだ。それなら尚更側にいて監視するべきだ。それに監視が目的で来ているのなら子供までつくる必要があったのだろうか。子供が産まれれば、子育てや家事で時間がとられ、監視しにくいだろうに、まさか、巳之吉に本気で惚れ込んだとでもいうのか。それで、

子供を理由に巳之吉を殺したくなかったのだろうか。

巳之吉とお雪についても疑問は絶えないが、茂作についても疑問は残る。茂作は雪女に殺されたのか、自然と死んでしまったのか。大吹雪の日、設備の整っていない場所で老人が寝てしまえば死んでしまうのではないだろうか。雪女に殺されたとすれば、何故殺されなければならなかったのか。雪女は無差別に人間を殺していたのだろうか。ならば巳之吉は若くて顔が良いというだけで生き延びたのだろうか。そして、あのシーンの雪女の台詞。巳之吉は声が出せない状況であった。また、茂作は死んでおり、雪女は巳之吉の個人情報など知る由もなかった。にもかかわらず雪女は巳之吉の名前を知っていた。妖というものは不思議な力を持っているのかもしれないが、人の名前がわかる能力が存在するのだろうか。雪女にそのような能力があるとは私は思わない。故に、雪女は以前から巳之吉の存在を知っていたのではないかと考える。もしかすると、本当に雪女は巳之吉に好意を寄せていたのかもしれない。

然し、やはり私は彼女を理解できない。

〈佳作〉

「耳無芳一の話」を読んで

広島県福山市 吉 田 壮 佑

「小泉八雲の作品」と思いうかべて私の中でまず出てくるのは怪談話だ。「雪女」や、「ろくろ首」など、とても有名な話があり、自分も幼い頃絵本にされたものをよく読んだ覚えがある。その中でも特に印象的だったのは「耳無芳一の話」だ。親がよくこの話を口にしたというのもあるが、単純にとっても面白い話だと思っていたのが一番の理由だ。そんな話を数年ぶりにもう一度読んでみる。

耳無芳一の話は、とても腕の良い琵琶法師であり、盲目の芳一が、ある日死んだ人々に演奏をしてしまい、次は殺される可能性がうまれたため、見えないように、納所と住職に全身に経を書いてもらったが、耳だけ書き忘れており、耳が引きちぎられて行ってしまったという内容だ。

まずは自分が幼い頃、なぜこの話をおもしろいと感じたのかについて考えてみる。あくまでも推測だが、当時の自分は、芳一の耳に経を書き忘れてしまった住職のことを、ドジだなだったり、自分の中である住職のイメージが真面目で堅実な感じだったため、それと真逆のマヌケだなと普段と違う住職になったため、おもしろいと感じたのではないのだろうかと考えた。納所については今回読んで知ったため、触れることができず、住職だけのイメージで残ったの

だろう。

そして今度はそこから成長した今の自分で話の感想を書いていく。この話を読み、一番強く感じたことは、「自分にもそういうことがあるな」ということだ。どういふことか説明していく。まず私は着眼点をまた住職にした。住職は納所と共に芳一に経を書いて助けようとしたが耳だけ書き忘れ、芳一の耳がとられてしまう。そしてその後住職は芳一に対し、自分の確認不足のせいだと謝罪し、芳一をひどく憐れんだ。これに私の実体験で重なることがあった。その一例を挙げると、小学生の頃、友達が発表するため、私に文章の相談をしに来てくれたのだが、私が確認を怠ってしまい、発表時その友達に大恥をかかせてしまったのだ。その後物語での住職と同じように、私の確認不足だと何度も何度もくりかえし謝罪した。私はその経験を心に留め、これからの一つ一つの行動、特に他人が関わる物事等に対しては、細心の注意をはらうことを決心した。ということは、耳無芳一の話も同じことを意味して書かれたのではないだろうか。そう言いきれる理由が二つある。一つ目は物語が私の実体験に類似している。そしてもう一つの理由は、物語で結果的に芳一の怪我が治ったという内容と、住職がもう二度とこのようなことにさらされることはないという内容のセリフが記されているからだ。この二つの文から読みとれるのは、事件が起こったが結果的におさまリ、元に戻ったということ。これに先程述べた私の決心を入れて考えると、事件が起こったが「今回は」結果的におさまリ、元に戻ったととらえられる。そうすれば、私の決心は、「二度と同じ

ような失敗をくりかえさないために一つ一つの行動に細心の注意をはらう」ということにもなる。そうすればそれを意味した物語だということも分かるだろう。そして八雲はこの単純かつ読みやすいこの物語をそのような意図で作ったと思うと、とても素晴らしい人物であり、「文豪」の名にふさわしい人物だととらえることもできる。それを通すとやはりこの物語を「おもしろい」と思うことは変わらない。

最終的に私は耳無芳一の話という物語とその作者である小泉八雲は両者共にとても素晴らしく、おもしろく、これこそが人々に称賛されるものなのだということを強く感じた。それと共にこのような作品をうみ出した八雲と、それを残してきた人々に感謝の念があふれる。

講評

昨年度は応募がなかった中学生の部ですが、今回は十八点もの感想文が全国から集まりました。小泉八雲への関心が高まっていることを嬉しく思うとともに、来年度以降も期待したいと思います。あらずじを追う感想文が多かったのは残念でしたが、上位に選出した感想文は独自の視点で書かれたものが多く、好感がもてました。

「常識」を取り上げた優秀賞は、自分が考える常識について振り返るとともに、八雲が考えていた常識について思いを馳せ、自

分の生き方につなげている点が高く評価されました。「雪女」「耳無芳一」の感想文では、自分の気持ちに素直になって思いを述べていること、以前読んだ時とは異なる深い読みができていることに感心しました。

(講師者 太田 強)

高校生の部

〈優秀賞〉

音のない世界で見つけたもの

京都府京都市 中村 天希

小泉八雲の「耳なし芳一」は、私にとって「見えないもの」に焦点を当てた一種の寓話のように思えた。盲目の琵琶法師である芳一は、目が見えないことで逆に「見えすぎている」のではないか。そんな風に私は感じたのだ。彼は最終的に耳がもぎ取られてしまうが、その「耳を失う」という悲劇こそが、彼にとって唯一の解放だったのかもしれない。

琵琶の音色に取り憑かれた怨霊たちの話は、表面的には恐ろしいが、どこか静謐で哀愁に満ちている。芳一が演奏する壇ノ浦の戦の話は、彼らがこの世に残した「生きた証」を聞かせるものであり、

未練そのものだ。私たちが普段感じる未練や後悔、過去に囚われる気持ち持ちは、怨霊たちの姿とどこか重なる。彼らはかつて存在していた「生」の残滓に取り憑かれ、芳一の琵琶の響きに自らの無念を委ねようとしているのだ。それは、私たちが未来に進めない理由を考える際の、一つの象徴とも言えるかもしれない。

芳一が盲目であるという設定も極めて意味深い。盲目であるがゆえに、彼は目に見えるものの誘惑から解放されている。だが、そのため彼は「耳」に頼らざるを得ない。音の世界に引き込まれる彼は、平家の怨霊たちが奏でる「声」に従い、やがて耳を失う。彼の耳がもぎ取られる瞬間、私は思わず自分自身を振り返ってしまった。現代に生きる私たちもまた、目で見て、耳で聞いて、無数の情報に飲み込まれている。多くのものが目に見えるようになった現代、芳一の盲目という設定は、逆説的に「見えないことの豊かさ」を教えてくれているのではないだろうか。

私自身、この話を読むと、情報過多の世界で「何を見て、何を聞くべきなのか」という問いに直面する。目に見えるものだけに囚われ、耳を閉ざすこともできない私たちは、芳一のように物理的な意味での「盲目」ではないが、内面的にはどうだろうか。今や、スマートフォンを手によれば、ニュースが、音楽が、誰かのつぶやきが際限なく流れ込んでくる。けれども、その中で本当に聞くべき音は、いったいどれほどあるのだろうか。騒々しさに埋もれて、大切な声を聞き逃してはいないだろうか。時には見えないもの、聞こえないものにこそ価値があるのではないか、と私は考えさせられるのだ。

芳一にとって、耳は「目」であった。彼の世界は音で成り立っており、聞くことが彼の全てだった。だからこそ、この世界との唯一の接点である「耳」を失う瞬間の痛みを想像することは難しい。だが、さらに難しいのは、彼がその痛みの中で何を得たのかを感じ取ることだ。耳を失ってしまった彼には、もはや怨霊たちの声は届かない。けれど、彼はその静寂の中で、これまで聞こえていなかった「音」を感じ取ることができたのではないだろうか。それは、誰にも見えず、誰にも聞こえない音。芳一自身がずっと求めていた、真実の音だったのかもしれない。

現代の私たちも、芳一のように何かを失うことで、初めてその価値に気づくのだと私は思う。騒々しいこの世界で、私たちはあまりに多くのことを見聞きしている。その一方で、本当に大切なものは、雑音の奥底でかすかに響いているに過ぎない。もし私たちが一度耳を閉ざす勇氣を持ったなら、その時初めて、世界は別の顔を見せてくれるかもしれない。

「耳なし芳一」はただの怪談ではなく、むしろ見えること、聞けること、その両方に振り回されている私たちに問いかけてくる。目に見えるものが全てではなく、耳に届くものもまた、限られた一部に過ぎないのだと。芳一の物語を読み終えた後、私は暫し思いに耽った。もし私が耳を失ったら、果たしてどんな世界が広がるのだろうか？ 音のない世界で、視覚の枠に囚われずに、別の「見え方」を手に入れることはできるのだろうか？ その問いに私は答えを見出せぬまま、ただぼんやりと天を仰ぐことしかできなかった。しか

講評

し、そこそが芳一が私たちに残した、最も価値のある贈り物ではないのだろうか。耳を閉ざすこと、それは単なる喪失ではなく、むしろ解放の始まりに他ならない。私たちはいつしかそのことを忘れ、視覚や聴覚に囚われた、限られた世界の中で息苦しく生きているのではないだろうか。

盲目の芳一が音を奪われることでさらなる解放を得たのではないか、という観察の鋭さを評価します。

何かを失って初めてわかる価値、生み出されるものがあります。

芳一が名人として大成した理由を耳を失ったからとする指摘に納得をしました。

ただ、審査員から結論の深さが足りないとの意見がありました。

「私は目や耳を失った世界を想像してただ、ぼんやり天を仰ぐ」のではなくもう一步、先を想像をして欲しかったです。

人間は死ぬ時にだんだん目が見えなくなり、最後に聴力を失うそうです。あなたの人生の最後に聞こえる音は、声は、音楽はどんなものでしょう。

芳一が無くしたものの代わりに美しさを生み出したとしたら、その美しさは死の延長線上にあるように思えます。

一般の部

これからも沢山、人に出会い、笑ったり、泣いたりしながら人生を楽しんでください。

人は最後に聞く音を探しながら生きているのですから。

(講評者 高嶋 敏展)

〈優秀賞〉

「雪おんな」の正体に迫る

「東大講義録」をレンズにして

福岡県北九州市 松 本 航 平

「幽霊の正体みたり枯れ尾花」

これは、怖いと思っている状況では、何事も怖く見えてしまう。という意味で、幽霊だと思つて見たものが、単なるススキの穂だったという江戸期の俳文に由来している。

この言葉を聞くと、幽霊に恐怖を感じるのではなく、人知を超えた恐怖の集合体が幽霊なのではないだろうかと考えてしまう。

そのように考えると、「雪おんな」は、恐怖を感じる存在ではあるが恐怖というフィルターを取り除けば、案外ススキの穂、つまり、幽霊とはまた違った存在に見えてくるような気がしなくもない

のである。

八雲が東京帝国大学で行った講義の一部を訳出した東大講義録に気になる記載がある。

「今日、宗教上、『神の』、『聖なる』、『奇跡的な』と称されるものはすべて、古代アングロサクソン人にとっては、『靈的』の一語をもって十分に説明されるものであった。(中略) 西洋諸国が今日奉じている神という觀念は、じつは幽霊の存在を信じた原初的信仰から発展してきたものであらう」

この記載の中で特筆すべきは、幽霊に対する感情が西洋の視点から見れば、神に対するそれと同義であるという点であると思う。

そのように考えると、「雪おんな」に対する、巳之吉の抱く恐怖は、崇拜と言ひ換えることも可能で、村の人が「自分たちとは生れのちがう、不思議な人間だと思っていた。」と抱く、恐怖とは異なる感情さえも、西洋視点では、神に対する感情と等しいと思われる。

また、物語上、「雪おんな」は女性であるが、当時の西洋における女性観を、八雲は次のように記している。

「女性是一个の崇拜対象であり、宗教である。あるいは、みなさんがもっとわかりやすい言葉を好むのであれば、女性是一个の神である。」

以上の事から、「雪おんな」の正体は、超自然的な「靈的」な意味で、男性の崇拜を受ける「女性」という意味で「神」と考えることも出来ないだろうか。

勿論、神と考えるなら、八雲の怪談・奇談は、恐ろしい結末や悲しい結末も多く、救いがないと言う反論もあるだろう。しかし、八雲の作品の中には、完全懲悪的な結末を迎える作品や、死者や魂が直接救われる作品も多く、『雪おんな』自体、約束を破ったが、子どもの存在がいたため、殺されないという戒めのような救いが描かれている。

これらの差異は、神という存在が救いと罰を両方与える存在と考えれば、説明がつくのではないだろうか。八雲の言葉を借りるなら「神というものは、人間よりはるかにたち優った存在であり、人間を助けもすれば、害したりもする。」と考えられ、八雲自身「雪おんな」を、そのような存在として描いていたのではないだろうか。

しかし、「雪おんな」が神と述べたところで、西洋の一方的視点からの平面的な感想に終始してしまう。現在まで八雲という存在や「雪おんな」が語り継がれている理由はもっと別次元にあるはずだ。そこで、当時の日本の価値観という奥行きを考えてみたい。

「雪おんな」が描かれた、明治の終わりから大正の初めにかけて、当時の日本では、良妻賢母主義的な女性像が台頭していた。これは、女性は良き妻、賢き母となり、家を支える事を良しとする価値観であり、明治三十二年に公布された、高等女学校令の影響もあり、裁縫等の実用的な教育をとおして、当時の一般的な女性像へと上り詰めていった。

この流れは、女性への教育普及という側面もあったが、女性の社会進路を家に限定し、守るための犠牲を厭わないという価値観を植

え付けた可能性がある。そのような女性像が、八雲の記した西洋の女性像とは異なる事は言うまでもないだろう。

しかし、作品の終盤、「そこに眠っている子供がなかったら、すぐにいま、あなたを殺してたところですよ！　ですから、よく、ほんとうによく子供たちのことをみてやってください。」こう雪おんなに言われたのは已之吉、そう夫であり、父でもある男性である。

この結末は、当時の日本人にとって、大きな衝撃だったのではないだろうか。当時の価値観で考えれば、この言葉は、家を守る役目を負う女性に対しての言葉であっただろう。しかし、その任を霊的な存在により、恐怖という感情で負わされたのは、男性であった。

つまり、この作品の奥行きは、八雲による西洋価値観の投影ではなく、当時の日本の価値観との芸術的対比である。これを、日本古来の物語と調和させ、新たな価値観として世に広めた功績は、日本にも西洋にも精通していた八雲にしか成しえなかったと思われる。

〈優良賞〉

「日本人の微笑」を読んで

神奈川県横浜市　新　倉　久　恵

この作品は「知られぬ日本の面影」に収められた論文です。日本人はなぜ辛い時に笑えるのかという疑問を作者の見聞、日本人の道

徳性や宗教観等をもとに結論づけていきます。

私がこの作品を読んでまず率直に思ったことは、「怪談」ではない。ということでした。小泉八雲氏といえば「耳なし芳一」、「怪談」としか思い浮かばなかった私にとって、作者がこのような日本人について書いた文章があったことにとても驚かされました。

この作品の中で、作者は「日本人の微笑」について考えていくわけですが、ある使用人の日本人女性の例をとりあげています。その女性は、自分の夫の葬式に行くというのに笑っていて、帰って来ても骨壺の中を雇い主に見せて笑っていたという話です。日本人が聞いてもやや不可解な話です。しかし作者は、この笑いの理由をこう考えていきます。

「日本人の礼儀正しさ」「道徳的資質」。そして「笑いは、極限にまで自己を抑制した礼節なのである」と。そして使用人の女性の笑いを

『彼女の微笑や笑い声は、そのとき、こんな意味だったはずである——「こんなつまらない話で、どうかお気を悪くなさらないください。お言葉とはいえ、わたしの不幸などという、取るにたらないことを申し上げて、まことに失礼いたしました』』と結論づけています。

私はこれを読んで、日本人でも考えつかないところまで日本人というものを分析し、掘り下げているところに、とても驚き、嬉しくも思いました。私も常々、日本人は生真面目な礼儀正しい国民であると思っていました。テレビドラマなどでも悲しい気持ちの登場人

物が、周囲の人に笑いを見せる場面も多いです。また、私の周辺では知り合い同志、時には知らない人達でも会釈やあいさつを交わしているのを見かけます。そのような日本人の良さを感じてくれた作者にありがたい気持ちになりました。

また、作者は宗教性からも日本人の微笑を考えていきます。作者の体験から、お地藏さまを拝む少年を見て「地藏の双子の兄弟のように思われた。」と書いています。そしてそこから「日本人の微笑は、菩薩の微笑と同じ概念——つまり、自制と克己から生まれる幸福をあらわしている。」と考えていきます。

私はお地藏さまを拝む少年を想像してみました。少しほっぺがふくらんで、笑っているような眠っているような穏やかな表情が思い浮かびました。思えば私も子供の頃、お地藏さまに出会ったと、誰に習ったわけでもないのに自然と手を合わせていたような気がします。私の中にも宗教的なものがあつたのだろうかと思いました。

ところでこの作品が書かれたのは明治時代。当時の日本人と現代の日本人の微笑とは果たして同じなのだろうかという疑問を持ちました。作者も作中で、当時でさえ、日本人の「礼儀正しさや、無心無欲や、善意にみちた優雅」について、「当世風の若い世代の連中のあいだからは、こういったものはほとんど姿を消している。」と述べています。今の時代、自制や我慢などは必ずしもよしとしない風潮があります。また、メール等で対面が少なくなり、微笑という表情を見せる機会も減ってしまったのではないかと懸念されます。「日本人の微笑」が、時代と共に変わるのとは仕方ないことだと思

います。しかし、少しでも対面を大切にして人に表情を見せる、人の表情を見る機会を持ちたいと感じました。

最後に「日本人の微笑」として思い出したことがあります。私の母のことです。私の父の葬儀の時、八十才過ぎの母は葬式の準備、様々な書類の手続き、提出におわれて疲れきっていました。そしてとんちんかんなことを言ったり、やつたりしてしまいました。集まった身内の中には、そんな母を怒鳴る人もいて母は泣いてしまいました。けれどそんな中で母と私が顔を合わせた時、母が笑ったのです。「こんな時に、何笑ってるの」と私は驚きと同時に一瞬怒りさえも覚えました。けれどこれが「日本人の微笑」というものだったのかもしれませんが。

作者は文末で「日本人の微笑」を「古い神々の温顔」ともいつています。この論文は難解で、正直、全部を読みこなすことはできませんでした。しかし、「日本人の微笑」について考えることができたとでもよかったです。分かったことをもとに、時には相手に誤解を与えるかもしれませんが、私の母のように自然に「日本人の微笑」ができればよいなと思いました。日本人の相手への気づかいができる「微笑」を大切にして、心がけていきたいと思っています。

〈佳作〉

こころ、と呼ぶ愛

京都府京都市 如月七日

民族アイデンティティを一旦無視しておいて、単純に、自分の生まれ育った愛着のある土地や国を褒められるのは嬉しい。しかし、それが「もの珍しいから」「自分にとって都合がよい（接待や特別な配慮をもらえる）から」という根拠に基づいているとなると、喜びはたちまち失望に変わる。ひとときの興味や「お得感」などすぐに冷めるもので、それが熱狂的であればあるほど空虚に感じる。だから私は熱く大きく愛を語る人間をあまり信用していないし、そういううわべだけの愛に辟易もしている。

著作・「心」で当時の日本人について語る小泉八雲の筆致は、どこまでも冷静でニュートラルだ。文筆家の随筆というよりも、科学などの研究者の報告書に近い。他国や他の民族と比較し、日本人を分析し、淡々と事実と考察を組み立てて述べていく。そこにきらびやかな修辞や大げさな賛辞は使われない。冷嘲とも言えそうなほどに鋭く、素っ気ないほどにあっさり、八雲が見聞した当時の日本人の姿や国の在り方を切り分けて整頓して積み上げていく。そこにあるのは、自身の感情や好悪をできるだけ排して客観的に理屈で日本人を論じようとする姿勢である。

しかし、その冷静さや硬さの向こうから、隠しきれずに見えてく

るものがある。行燈や提灯の薄い紙や細い竹や木の向こうから柔らかなにもれ出てくる光のように、それは八雲の文章の中で静かに燃えて読み手を照らしている。ひとときの興味や熱狂ではなく、深く長く続く。それは、日本人という観察と考察の対象に注がれる。八雲のたしかな愛情である。

ある事象にどんな意味を見出すのか。それは、それを見る者の感性に左右される。同じ言動を、ある人は「野蛮」と評し、違う人は「勇ましい」と評する。前者は負の感情を含んでいるだろうし、後者には憧れの気持ちがあるかもしれない。当時の日本人の姿を、「西洋文化的でない」「理屈に合わない」と評する外国人もいただろう。そんな中で、八雲は「他人の子であっても、子どもという存在に特別な思いを寄せている」日本人や、一言では括れない感情や情緒の機微に聴くそれに感動することができる日本人の庶民たちの姿を、細やかに観察して書き記している。誰かが見れば欠点かもしれないことを、八雲は美しく尊いものとして感じ取り、それを論証しようとした。

「趨勢一瞥」という章では、明治期から日本に入国して商売や西洋的な教育を押し進めようとした外国人と日本人について述べている。言うまでもなく八雲自身はギリシャ生まれの外国人で、世界の各地をまわって日本にやって来た。他の外国人と立場は同じだったのでは、と思いきや、八雲の感性や心情は常に日本人の側にあることが分かってくる。西洋の文明を「進んでいる」としつつ、日本人が育んできた独自の文明を捻じ曲げることに批判的である。強引に

侵入してきた外国人にはじめは金や労働力を搾取される一方だった日本人が、時間をかけて遅しくその主導権を取り返すようになった様や、英語や西洋的な教育を中途半端に取り入れることで起こる弊害。八雲は、冷静でありながらも終始日本人の味方として論旨を展開する。

個人と個人の関係でも、好ましく思っている相手のことならいくらでも長所を挙げられる。たとえ小さくても、美点を見つけて愛でることが出来る。その人を好ましいと思うから、美しさを見出す。八雲と日本人の関係にもそれが根底にある。八雲は、それを静かに論理をもって「心」という文章で表した。

八雲は、当時の日本人の精神性や文化、出来事をすべてひっくりめて「心（こころ）」とした。自分の母語である英語の単語でも、心理学や文化人類学的な専門用語でもない。こころ、という優しい響きの日本語でそつと掬い上げた。

八雲が「心」で語る日本人への愛は、穏やかな湖面のようだ。覗き込めば、そこには鏡のように自分の顔が映る。静かに水をたたえたその湖面を愛しく思う自分の顔は、きつと優しく穏やかな顔をしている。その優しさを受けた湖面はますます美しく輝き、さらに覗き込んだ者の心を柔らかにする。日本人と八雲とがそういう静かでたしかな愛を共有している様子が、一冊の中に流れているように思う。

大勢の前で愛の言葉を叫びながら両手を広げてハグ&キス、という愛ではない。誰にも見られていない所で二人が静かに無言で寄り

添う、ひっそりとした愛に似ている。静謐な雪のように音もなく滔々と降り積もる八雲の愛が、書かれた当時から現代にいたるまでずっと残っている。

〈佳作〉

時空を超える八雲の魂

「門づけ」の印象

福岡県飯塚市 井 上 卓 也

今から約四十年前、小学校の図書館にあったポプラ社のジュニア文学名作選「怪談」を読んだときから、小泉八雲は私の中に棲みついてしまった。少年の私にとって八雲は、恐怖や不思議だけでなく、日本という国の持つ美しさをやさしく語って聞かせてくれる紳士であった。「ヘルンさん」という呼称はかなり後年に知ったのだが、心持ちとしてはそう呼びかけたくなるような親しみを、私は八雲に対して抱き続けてきた。

その本に収録されていた「門づけ」がとりわけ印象に残っているのは、もしかしたら、味わい深い挿絵のせいかもしれない。それでもなお、一人の歌うたいの姿を捉えた外国人・八雲の眼差しは、少年だった私の心に何かしら深く訴えるものがあつた。

門づけの女の歌う音律を八雲は「西洋の楽譜にはのせられたこと

のない細かい調子」(他の訳では「半音、さらにその半々音」と描写する。つまり八雲は西洋音階に関する基礎的な知識を備えていて、それをもとに自らの体験した事象を客観的に分析しつつ、一方でその声音は「忘れられた場所と時の感覚、今生の記憶の中にはない感覚がよみがえってくる」ものだという、極めて主観的かつ非科学的な所感を披歴している。そして、この点こそがまさに「八雲ならでは」である。

八雲が「輪廻」や「転生」というものを信じていたことは、間違いないと思われる。それには、日本で聞き知った様々な怪談・奇談の影響もあるのかもしれない。ただ、これは私の推測に過ぎないのだが、長年にわたり浮草のような旅の暮らしをしてきたラフカディオは、日本に来て、その風景や人の心に触れて、初めて「帰ってきた」のみならず「私はかつて(生まれる前に)ここにいた」と本能的に懐かしく感知したのではないか。

「門づけ」の終盤で八雲は、自らの二十五年前の記憶を引用する。ロンドンの公園で一人の少女が発した「おやすみなさい」の声音が呼び起こす感情、それはこの世に生きる「私」の感情ではなく、人の生まれる前の忘れられた感情である。そしてそれは、門づけの女の歌声が呼び起こす何かと通じている、と。

ところで私は最近、たまたま「ちくま評伝シリーズ〈ボルトレ〉」小泉八雲「日本を見つめる西洋の眼差し」を読んで、この「門づけ」という掌編が、八雲が日本での暮らしに大きな悩みを抱えていた時期に書かれたものであることを知った。「若く貧しいハーンの

心に沁みたひとことと、遠い日本で聴いた盲目の歌い手の歌とがつながった」(前掲書より)とき、日本に来たときに抱いた「帰ってきた」という本能的な感慨が、「ここで生きていく」という確信に形を変えたのだとしたら。「門づけ」は「前世から現世に受け継がれる感情」に関する個人的所感の記録であるだけでなく、八雲の人生における重大なマイルストーンであったかもしれない、そう思うとき私の胸には、初読時に持ち得なかった切なくも温かい感情が湧き起こってくる。

八雲はこの掌編の結びで、「死者たちは決して、完全に死んだわけではない」と語る。私は、それは八雲自身に当てはまることであろうと考えている。八雲が体験した「時」「場所」の記憶は、死んだ八雲とともに、今を生きる私たちの心のどこかで眠っている。そして、目に見える景色、耳に聞こえる音、吹き来る風の匂いとともに、それは不意に目を覚ますかもしれない。不思議な懐かしさを伴って。

つまり私は、小泉八雲は実は今でも、姿は認められずとも、この世に生きていると思っているのである。没後一二〇年を経てなお、世界中の人々に影響を与え続けているのも、それらの人々の中で八雲の記憶が目覚まし続けているからではないのか。

さらに言えば私は、八雲に、かつて少年だった私に語りかけてくれたヘルンさんに会いたい、会えたらいいな、と本当に思っているのである。時空を超えて存在し続ける何かがあることを信じていたヘルンさんなら、一旦はこの世を去っても、かつて日本に「帰る場

所」を見つけたように、また帰ってくると分かっているのではないだろうか。それがどんな形なのかは、知る由もないけれど。

私はいつか、八雲に所縁の深い松江を訪れたいと願っている。安直かもしれないが、八雲の魂は、自らが暮らし、愛した場所に帰ってくるものだと思うから。

私は想像する。晴れた日の夕間暮れ、夕陽を背に通りの向こうから歩いてくる、あるいは、通りの角を曲がったところに佇んでいる隻眼の紳士に出会ったら。黄昏の中、誰なのかは確かでないけれど、「ヘルンさん?」と勇気を出して呼びかけてみようか。(了)

《佳作》

小泉八雲が日本の教育に残したもの

埼玉県熊谷市 風間麗子

私は、現役の高校教師だ。

私の尊敬する八雲も教師だった。八雲に関する資料を読むうちに教師をしていたことが分かった。同じ教師として、八雲の教師時代が、どんなものだったのか大変興味が湧き調べたくなった。

初めに、八雲に関する膨大な資料から「英語教師の日記から」という本を読んだ。これは、八雲が島根県松江の尋常中学校と師範学校で、一年間、英語教師として契約していた時のことが書かれてい

る貴重な本である。本の中で八雲は、学校を予想していたよりもずっと面白い仕事であると述べている。そして、生徒のことは「みんな驚くほどおとなしくて我慢強く優しくて可愛らしい」と褒めていた。

又、生徒の書道での技術の高さや、絵画の専門性にも関心をし、生徒一人一人の能力の高さにも驚いていた。

そして、八雲は日本の教育について、近代日本の教育制度においては、教育はすべて最大限の「親切」と「優しさ」をもって行われている。教師は文字通り教師 (teacher) であって、英語の "mastery" の意味における支配者ではない。教師は教え子に対し、年上の兄や姉のような立場にある。と書いた。私は、これを読み通常のクラスでの自分の様子^{ようす}を振り返ってみた。私は教師なので大勢の生徒に対して指示をし作業をやらさなければならない。この時に、生徒に対して威圧的になり恐怖を与え行動を必要以上に束縛をしていないか考えた。もしかしたら、気付かないうちに支配的になっていたかもしれない。だとしたら、生徒は私と一緒にいる時間は苦痛以外の何ものでもなくなってしまう。生徒は、毎回新しいことばかりを学校で教わる。その時に「親切」と「優しさ」をもって接しなければ生徒の意欲を失くしてしまう。これは、教師としてあってはならないこと。これからは、生徒に対して年上の姉の立場で接したい。とても勉強になった。

八雲は、教師と生徒について、生徒達は嫌いな先生を侮辱したり、教室で妨害するようなことは減多にしない。彼らはただ単に、

その教師が学校を辞めるまで、授業に出ることを拒否するだけである。先生の態度が親切心に欠けていても、その先生に教師としての能力や公平な感覚があると思われているうちは、生徒たちは先生に服従し、敬意を払う。生徒たちは、教師のえこひいきや不公平を見分ける実に鋭敏な感覚を持っている。しかし、その逆に、教師が愛想が良く、友好的な性格であっても、生徒たちの知識を得たいという要求にも、技術を身につけたいという要求にも応じることができない教師を解雇してくれるように、と生徒から要請が起こったのを知っている。生徒達の不満は、

「僕たちは、あの先生が好きですし、とても親切です。でも先生は、僕たちが教えて欲しいと思うことを教えられないんです。先生は僕たちの質問に答えられませんでした。ぜひ、別の先生に代えていただきたいのです」

その先生は、まだ若く教科の十分な知識を持ちあわせておらず教師としての経験もなかった。日本では、教師が成功するか否かは、学位によって保証されることはなく、その教師の実践的な知識と、それを簡潔かつ十分納得がいくように教える能力にかかっている。と述べた。

正に、この生徒から教師への不満というのは現代の学校にも通じるものがある。私も、生徒の為に毎日、朝早くから夜遅くまで学校で働いているが、生徒から不満を言われたことがある。その時は、悲しくて泣きそうになり床に、しゃがみ込んだ。確かに教師として教える力が足りないのは問題であるが、教師も頑張っているのではあ

る。生徒に対して親切であるのなら、その教師を温かく見守って欲しい。初めから完璧な教師はいない。しかし、生徒を大切に思い生徒の能力を伸ばしたいと頑張る教師ばかりだ。それは、理解をして欲しい。

それから、程なくして八雲は松江を去る。その時、八雲が生徒へ贈った言葉に胸を打たれた。八雲は、

「気高く、市民生活の指針ともいえるその願いとは、国のために死ぬことではなくて、国のために生きることです。心やさしく聡明な祖先のように、日本の政府は諸君にこのような優れた学校を用意し、科学の世紀が提供しうる最高の教育を、他の文明国では真似できないような低費用で提供しています。これは、皆さんの一人一人が、この国をこれまでになくより賢く、より豊かに、より強くすることを期待してのことなのです」と述べた。

八雲の言葉が私の心に深く入り、涙が溢れるのは、何故だろう。百年以上も経った今も八雲の言葉が生きています。きつと八雲は、日本人の誰よりも日本の未来を真剣に考えていた。そして、日本人の誰よりも日本を愛し、日本人の生徒を愛した。八雲に教わった生徒は幸せだ。

八雲が日本に残したものは、「生きる」という、日本のために生きるという大切なことだった。

講評

今年度は五十を超えるすばらしい感想文を楽しみながら読むことができました。

優秀賞は『小泉八雲東大講義録』をてがかりとして「雪女」を読み解こうとしたもので、幽霊や神といった存在に人間が向ける態度（あるいはその逆）の共通点を「雪女」の中で考察している点が全ての審査員から高く評価されました。優良賞は「日本人の微笑」に関するもので、世代間で異なる微笑について実生活の具体例を挙げながら述べられています。佳作の三作も、八雲の文章を読者自身の世界にしっかりと引き込んだうえで書かれているところが実に見事でした。

とはいえ、どの感想文も甲乙つけがたく、審査するのが大変でした。来年度の感想文も楽しみにお待ちしております。

（講評者 三成 清香）

詩

〈優秀賞〉

抽斗の奥には

青森県八戸市 長 根 りんこ

今夜も 箆笥の前に立つお園さん

あなたの体は半分透き通っている

何を探しているのか

何がひっかかっているのか

夜毎 しみじみ箆笥を見ているお園さん

あなたの心は半分透き通っている

ついに探し当てたのは

抽斗の奥に隠れていたのは

一通の恋文だった

「この文 焼いて進ぜようかな」

大玄和尚の約束を聴き

につこりほえんでお園さんは消えた

再びこの世に姿を現すことはなかった

抽斗の奥には秘密がある
うつくしく かなしい秘密

お園さんの抽斗の奥には
みどり伯母さんもいる

みどりちゃんは母の十二歳上の姉
女学校の頃からずっと病弱で

二階の部屋から出ることもなく
本を読み縫い物をする静かな日々

愛生堂のお医者様が馬で往診に来たという
みどりちゃんは二十三歳で亡くなった

抽斗の奥で見つけたのは

着物の下に隠れていたのは

誰かの学生帽だった

訪ねてくる人はいなかったのに
どこから来ていつからいたのか

母の胸に刻まれた 鮮明な不思議

抽斗の奥には秘密がある

うつくしく かなしい秘密

お園さんにも みどりちゃんにも

この抽斗の奥にも ある

温石のように大切に甘美な 秘密
あの世には持っていけない 秘密

「この文 焼いて進ぜようかな」

八雲先生のやさしい声が聴こえる

恋文も 学生帽も この秘密も

まだ持っていていいのですね

〈優良賞〉

引き袖

埼玉県さいたま市 くるみ

わたしが袖を引いたなら
そうっと目を開けてみて

ようやく日が落ちたから

じいっと闇に耳を澄まして

夜風にのせて静かに歌うわ

あなたへの愛を、哀しみを

わたしが袖を引いたなら

すうっと脚をすり合わせて

おんなの柔い皮膚だから
ぐうっと腰を抱き寄せて
夜風にのせて静かに歌うわ
あなたへの愛を、寂しみを

わたしが袖を離れたなら
ぎゅっと目を閉じていて
もうじき日が昇るから
どうかわたしを見ないで
夜風とともに静かに消えるわ
愛だけ残して、醜い墓は

〈佳作〉

海を越えて

大阪府大阪市 宇里直子

海を越え異邦を渡ると
奇譚の河が流れている

遠い存在だった地に足跡を
彼のトランクには

異国情緒が詰め込まれる
夢想幻想夢追い敗れても
挫折は錆びつき
覚醒の歴史が待っている
影に踏み潰され出現する妖気が
雲間から射す光に変わる

古い歴史を紐解き
妖魔漂う風土の森に分け入り
霊的異邦人はこの国に根を降ろす
時の風が吹き荒れようと
素晴らしい四季情緒を愛し
変わり果てゆく未来を
悲しげに見続ける

見えない目の中にも
懐古の情景風情を刻み
物語を永遠にして
骨を埋める^{うず}

《佳作》

むかしのはなし 今のはなし

神奈川県横浜市 新倉久恵

むかしのはなし

あそびのはなし

集まると 誰か静かに 語り出す

こわい
はなし

次は次は

次は どうなるの

こわいけど 面白がって 知りたくて

みんなその場を はなれない

夕暮れの 一人で歩く 帰り道

細いじやり道

あれ 誰かいる

のっぺらぼうだったらどうしよう

夕暮れの 走り出してた 帰り道

古い玄関 ひき戸を開けて

ズック飛ばして はいあがる家

誰もいない

いつでもいる

お母ちゃん いない

奥座敷 着物の人が いるようで

ろくろ首だったらどうしよう

夜になり 聞いたはなしを じっくりと

聞いたことばを 思い出す

次の日も その次の日も

何日もこわがっては 思い出し

何日も面白がっては 思い出す

今のはなし

遊びのはなし

誰一人 ^{だれひとり} 集まらないし しやべらない

怖いはなし

言葉 あふれ

あふれ あふれ出す

言葉は とどまりもせず 流れてく

受けとめきれず 置き去りに

疲れるな 一人つぶやく せわしくて

だけども
たくさん時が

過ぎたあと こんなきょうでも 大切な
なつかしい 戻りたい日に なるんだよ

夕暮れ空に 素晴らしくいい

一日だったと
話して帰る

講 評

今年の応募数は三十五篇で、昨年より増えましたし、読み応えのある作品も増えたように思います。今回も、八雲作品に対する理解と共感、そこから拡がる想像の世界を表現できている作品が受賞しました。

優秀賞「抽斗の奥には」は、「恋文」と「学生帽」の話を重ね合わせながら、抽斗の奥の「秘密」に迫っています。丁寧な表現描写が印象に残ります。

優良賞「引き袖」は、一連六行を三連に書き分けてあり、構成力を感じます。オノマトペを意識的に用いていて、効果的です。

佳作二篇は、八雲の作品世界の不思議さや歴史を語る「妖気」に着目した作品ですが、詩としてのダイナミズムに乏しい点で、少し劣りました。

(講評者 川辺 真)

【審査員】 稲田 忠徳 井上 孝弘 太田 強

川辺 真 高嶋 敏展 三成 清香

村瀬 達男 吉田 紀子 (五十音順)

令和 6 年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文・詩 入賞作品集**

令和 7 年 3 月

編集・発行 松 江 市
松江市教育委員会
一般社団法人八雲会